Be more !

焔水無月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｂｅ　ｍｏｒｅ！

【Ｎコード】
Ｎ５６８８Ｗ

【作者名】
焔水無月

【あらすじ】
私立エーテル学園を舞台に繰り広げられる彼らの恋愛（？）生活、最後の結末まで見逃すな！

ｓｃｅｎｅ１（前書き）

この作品には、ＢＬが多分に含まれています。　ご注意ください。

年齢制限はありませんので、どなたでもお読みいただけます。

scene1

神様は理不尽なんだ！
僕が一体何をしたの？
何であのこを連れて行っちゃったの…！

――――――……

俺は丁度正門をくぐったところだった。
いつもと変わらない風景、何も起こらない日常。
全く、何が楽しくてココ（高校）に来てるんだか…。

ここは『私立エーテル学園』
将来、研究者になろうとする者たちを集めた高校。

全寮制で学費は他の私立の約半分、その他施設も完備された、「凄い高校」だ。
しかしこれは、周りの奴らから見た学園の姿でしかない。

俺ら生徒から言わせて貰えば、ここは「監獄」って言っても過言じゃない。

２４時間、ずっと学園の監視下。気が狂った奴は数知れず。
不正もすぐにバレるしな。

ったく、面倒くせー…

「よぉ、一哉ぁっ！」

あ、俺は神蔵一哉（かみくかずや）だから、大体一哉って呼ばれる事が多い。

「あ？　何だよ廉國」

こいつは藤堂廉國（とうどうやすくに）。
男子バスケ部補欠。
同じクラスのムードメーカーだ。
俺の数少ない話し相手の一人なんだか…、

「聞いて驚け！　オレ、遂に香坂先輩と付き合うことになった！」
「あー、ハイハイ、そーですか」
あれだ、その…、男性しか好きになれない体質らしい。

入学式直後に告白された時は、本当に驚いたもんだ。
（その後丁重に御断りしたが。）

「何だよー、反応薄いだろー！」「いや、この前も報告聞いたばっかだしさ…」
「ふん！見てろよ！　近いうちに悔しいって言わせてやるっ！」
「あぁ、ご勝手に」

正直、廉國のノロケ話は精神的に辛かったりする。
俺はノーマルだから、その手の話題にはついていけない。

「そう言えば一哉」

「あ？　何だよ」
「今日さぁ、季節外れだけど、転校生が来るらしいじゃん？」
「え、マジで？」
「何だ、昨日のＳＨＬで話聞いてなかったのかよ」
昨日……は、あー…、部活で疲れてて、爆睡してたな。
「何でも、捜し物がこの学園にあるから、って言ってるらしいんだけど…」
「うわ…何その理由」
本気で言ってるなら、まず腕の良い精神科を紹介するべきだな。
「それで…って、あ…」
「？　どうしたんだ、いきなり黙って…」
廉國の向いている方向を見てみると、何やら小さな人だかりができている。
誰かを取り囲んで話をしているようだ。
「多分、あいつが転校生かな？」「だろうなぁ…、廉國お前、とりあえず首を傾げるのはやめろ」
こいつの男としての尊厳は一体どこに行ったんだろうな。
「あ、目ぇ合った」
気にして見ていたら、転校生らしき奴と目が合ってしまった。
「一哉……、転校生、何かこっち来てない…？」

「あぁ…、笑顔で手まで振ってるな。　お前、あいつと面識あるのか？」
「オレ、あんなイケメン知りませんけど」
え、何？　…もしかして俺！？

ｓｃｅｎｅ１（後書き）

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

ｓｃｅｎｅ２（前書き）

前回の続きです（゜∇゜）

scene2

「カズ！」
「えっと…？」
「カズだよね！？」

誰だ、こいつ…。
白銀の髪に、中性的な顔…？

「僕だよ、直樹！　飛鳥李直樹（あすかいなおき）。よく一緒に遊んだだろ？」

……？

「覚えて…ないの？」
「あぁ、悪いけど…」
「…そっか、そんなものかな」
「一哉、こいつと会った事があるのか？」
「あ、悪いな廉國。　存在忘れてたわ」
「なっ、ひでぇ！」
「冗談だよ、冗談」
「…仲、いいんだね。　一哉」
「えっ…？あ、あぁ」

何だ…？
今、何か睨まれたような…。

「…まぁ、これからよろしくね、一哉！」
「おう、よろしくな」
「あっ、オレは藤堂廉國！　好きに呼んでくれよな！」

「うん、…こちらこそよろしくね、廉國君」

一体この引っ掛かる感じは何なんだ…？
この直樹って奴は誰なんだ？

「一哉！　時間やばいって！このままじゃ遅刻だ！！」
「ぅお、マジだ！　今日は教官が立ち番の日だし！」
「…僕は一度教務室に行かないといけないから、また後でね」

scene2（後書き）

まだ続くよ！

halfscene1（前書き）

一哉、廉國と別れた後の直樹のシーンです。
ある意味、番外編というところでしょうか？

halfscene1

…一哉…、一哉、一哉一哉一哉一哉…！！
何で僕…っ、俺のこと忘れてんだよ！あのバカッ！！
俺がどんだけ探したか…！
あの時から、ずっと探してたんだからな！？
なのに…！！
なのに、覚えてないってどういう事だよ！！？
しかも、あんな訳の分からない男と親しげに…っ！
…許せない！
お前は、俺だけ見てればいいんだよ、一哉…！！
手を回してクラスは同じになるようにした…。
担任にも嘘をついて不審に思われないように仕組んだ。
でも、そんなんじゃ駄目だ。
もっと…もっと一哉を俺だけが独占するんだ…！
俺だけを必要とするようにならいといけないんだよ、一哉…。

ｈａｌｆｓｃｅｎｅ１（後書き）

今後のｈａｌｆｓｃｅｎｅも必読です！
視点が違うと、真相が見えてきます…。

ｓｃｅｎｅ３（前書き）

続きです（゜∇゜）

scene3

―SHR―

「今日からエーテル学園に転校して来ました、飛鳥李直樹と言います。」

「飛鳥李君は家庭の都合により、急な転校となりました。　困っていたら、助けてあげるように」

あ……、あいつ、同じクラスになったのか。

「かずっちー、どうしたんだー？動きが止まってるぞー？」

「え、あ…、ちょっと考え事してたからさ…」

「困った時はこの由紀乃様に言えよー？」

こののんびりとした口調の奴は、由紀乃雅彦（ゆきの まさひこ）。

少し変わった奴だけど、いざって時には頼りになる。

「それがさぁ、俺、あの直樹と前に会った事があるらしいんだけどさ、記憶がねぇんだよ」

「ふーん？　かずっちにしては珍しいねぇ」

「そうなんだよ」

俺は人に関しては記憶力に自信がある方だったのに…。

「まー、いつか思い出すんじゃないかなぁ？」

「…そうだな」

「そこ！勝手に喋らない！」

「先生、怖いねぇ」

…笑いながら言うことか…？

「えー…、君の席は…うん。　神蔵の隣だ」
「あっ、一哉！」
「よっ」
「何だ、お前たち知り合いなのか？」
「はい、さっき教務室に行く前に会ったんです！」
「じゃあ調度いい。神蔵、この後飛鳥李を案内してやれ」
「…分かりました」

まさか同じクラスになるなんて、こんな偶然もあるんだな…。
この学園、１学年につき１０クラスあるってのに。

「今日のＳＨＲはここまで！」

―放課後―

「一哉！　今日、案内してもらってもいいかな？」
「いいぞ。　まず何から見たいとか、希望はあるか？」
「そうだなぁ…、主要な移動教室を教えてほしいな。　明日から早速授業があるし」
「よし、じゃあまずは科学実験室に行くか」
「うん！」

さて、行くか…　。
って、ぅわっ！
扉が勝手に開いて…！？

「…！　悪い、驚かせたか？」
「何だ、冬夜先輩か。　もー、先輩…、その変なドアの開けかたやめてくださいよ。結構怖いですから」
「…善処する」
「…一哉、この人は？」
「滕月冬夜（かなづきとうや）先輩。　俺らの一つ上な。」
「随分体格がいいんだね」
「柔道、やってるから…」
「しかも主将なんだぜ！」
「へぇ…？」

…まただ。
また機嫌が悪くなった。
この浮き沈みの原因は一体何なんだ…？

「……」
「えと…、僕の顔に何かついてるんでしょうか？」
「…いや、何でもない。　これからよろしく」
「はい…、よろしくお願いします先輩」

冬夜先輩、どうかしたのか…？
急に直樹をじっと見たりなんかして。

「…これから僕、一哉に校内を案内してもらうので」
「…そうか。　邪魔をしたな」
「いいえ、僕もいろんな方と話をしたいと思っていたので」
「そろそろ行くか？　直樹」
「うん、そうするよ」
「じゃあ、お先に失礼します」

「…またな」

口数は少ないけど、結構優しいんだよな、冬夜先輩。

「一哉」

「え？　何ですか？先輩」

呼び止められた…？

「……気を付けろよ」

……え？

「先輩、気を付けるって、一体何に…」

「……」

…行っちまった。

先輩は『何に』対して『気を付けろ』って言ったんだ？

「…一哉、僕を案内してくれるんでしょ？」

「あ、あぁ…」

――…結構、自分なりに考えてみたけど、分からずじまいだった。

ｓｃｅｎｅ３（後書き）

今回はちょっと長めでした！

ｓｃｅｎｅ４（前書き）

続きです（゜∇゜）

scene4

「着いたぞ。　ここが科学実験室だ」
「わ…さすが理系一本でやってるだけあるね。　本当に最新の設備ばっかりだよ」
「特にそれは、この前入ったばっかのやつだからな」

エーテル学園は、理系専門で教育をしている。
学力も高い方なので、国からも補助されてるらしい…。

「一哉、これは何？」
「それは…ＰＥＴＣＴ、だったかな。　俺は専門外だから詳しくは知らないけど、ガンの予備軍でもわかるらしいな、その機械」
「へぇー…」

そう言えば、直樹の専門って何なんだ？
まだ聞いてなかったな…。

「直樹、お前は何を専攻してるんだ？」
「聞きたい？」
「勿体ぶるなよ」
「ふふ、一哉は案外せっかちなんだね」
「…自覚はしてる」
「僕は…薬について専攻してるよ。いろんな薬が使えるって、何かと便利だと思わない？」
「あ、あぁ…」

…不気味だ。
さっきから目が笑ってない。

ずっと、俺をなめ回すように、観察するように見てくる。

「僕の家は薬局だからさ」

…？

「いっぱい薬があるんだ」

駄目だ、これ以上、ここにいては、いけない。

「何でも揃うんだよ」

何で、いてはいけない？

「…、人にだって使える」

……知ってるから。

「だから…さ、手伝ってよ」

何を？

「オレの実・験・台♪」

こいつの本性を。

…鈍い音が聞こえ、そこで意識が途切れた――…

ｓｃｅｎｅ４（後書き）

ついに直樹の本性が…！

ｓｃｅｎｅ５（前書き）

続きです（゜∇゜）

scene5

……コポコポと泡の弾ける音がする。

「――。　……――～」

ひんやりとした、固い感触が背中に突き刺さる。

「―っと、ぉ…た？」

……ここは…、

「…やっと、起きた？」

…～～っ！！？

「良かったー、ちょっと殴って薬飲ませただけなのに、３時間も起きないんだから…」

「直樹！」

「何？　近くにいるんだから、そんなに大声じゃなくても良いんだよ？」

「…ふざけんな！　お前何やってるか分かってんのか！？」

「ふざけてなんかないし、勿論分かってるさ」

一気に周りの気温が下がった気がした。

全部を見透かすような眼差しが向けられる。

「何でこんな…！」

「分からないなら、残念だね。　自業自得なんじゃない？」

「一発殴らせろ！」
「…ふふっ」
「お前……っ！！？」
…何だ！？　動けない！！？
「今頃気が付いたの？」
長めのチェーンがついた手錠、足枷で拘束されている…！
どうやら、チェーンの先端は部屋の壁に開いている４つの穴にそれぞれ繋がっているらしい。
「…何だよこれ」
「見たまんまさ。　手錠と足枷」
「…くそっ！　お前どうかしてるんじゃないか！？」
「俺は本気だけど」
話は通じないか…！
「こんな事して何の意味があるんだよ！！」
「意味なら…あるさ」
気味の悪い、顔に張り付いたような薄笑いが無表情に変わる。
急に顔を寄せると、俺の顎を掴んで、上を向かせ…、
「一哉…、君を俺のものにしたいんだよ」
「なっ…！！？」
「そんなに驚かないでってば」

何を言ってるんだ！？

「…昔の事を忘れた一哉が悪いんだから…」

「昔って一体何の……っ！　んぅっ！？」

なっ…、待て…！　何を…！！？

「ん…、もしかしてキスは初めてだった？」

「ふ、ぅ…っ、お前、何、して…っ…」

「図星、かな？　…嬉しいなぁ、僕が初めてを貰っちゃったんだね…？」

「離れろ！　俺から離れろよ！」

「俺には離れる理由がない」

「っ、お前なんか嫌いだ！」

「！！」

「変わった奴だとは思ってたが、ここまで変態だったとはな！」

「……」

何も言わなくなった…？

もしかして、精神的に効いてんのか…！？

「お前みたいな変態、話したくもないね！」

「……随分言ってくれたね」

「ひ…っ！？」

乱暴に、近くにあったベットの上に引き倒される。

「お仕置きだよ」

手に持っているのは…何かのリモコン…？

―次の瞬間…

『ガチンッ』と、歯車の噛み合う音がした。

「何をしたんだ！」

「気になる？　…今に分かるさ」

ガラガラと重い物が巻き取られる音が暗い部屋に響き始めた。

scene5（後書き）

あれ…？

これ、全年齢のはず…（汗；）

ｈａｌｆｓｃｅｎｅ２（前書き）

ｓｃｅｎｅ５の少し前の舞台裏です。

halfscene2

一週間程前にある売り土地を買った。
誰も見向きもしないような荒れた所だ。

「んー…、あ、と、はー」

後は、あいつに仕事を言いつけて部屋を造らせればいい。

「…あ、もしもし？　俺だけど」
『おー、久しぶりぃ』
「急で悪いんだけどさ、１つ地下室造ってくれる？」
『あ、うん。　いーよ』
「金はいくらでも出すから、カモフラで上に家も建てて欲しいんだけど」
『了ー解ー。　地下室で内装の希望とかあるー？』

希望…、希望か…。
…そうだな。

「手錠と足枷、長めのチェーン付き」
『…随分、マニアックな趣味になったんだねぇ』
「あと、そのチェーンの先は壁につけて…、いや…」
『なぁに？』
「…仕掛けって作れるか？」
『程度によるよー？』

あまり大掛かりな仕掛けはできないな…。

「壁に４つ穴をあけて、それぞれに手、手、足、足から延びてるチェーンを通して欲しい」
『ふむふむ…』
「それらのチェーンを壁の向こうで機械に繋げてくれ」
『どんな機械ー？』
「リモコンのスイッチ１つでチェーンを巻き取ってくれるやつを頼めるか？」
『あー、張り付けにしたいってコトー？』
「まぁ、そうだな。　これだったら出来るか？」
『任せといて～。　必ず納得のいく部屋を造るよー！』

「…じゃあ、よろしくな。　雅彦」

halfscene2（後書き）

まだ続きます…！

ｓｃｅｎｅ６（前書き）

続きです（゜∇゜）

…さすがに深夜の執筆はキツいですよー（ー．ー；）

scene6

何の音かと、暗い中で目を凝らしていると、床の上でチェーンが動いているのが見えた。

「どこに動いて…？」

動きを追っていくと、どうやらあの壁に開いている穴に引っ張りこまれているらしい…。

「目の動きから見て、何がどうして鳴っている音かは分かったみたいだね」

「…あぁ」

「この後の予想はついた？」

「何となくな」

「その割には随分冷静みたいだけど…」

「お前の持ってるリモコンで操作しない限り、停まりそうにないからな…。　どうしようもないことは仕方がない」

「うーん…、もっと抵抗してくれた方が良かったんだけどなぁ…」

「チッ…、この変態」

話している間にも、余りで延びていたチェーンは壁の穴に消えていく。

「…本当の目的は何だ」

「本当も何も…、さっき言っただろ？　お前を俺のモノにしたいってさ」

「そんなはずない。　…子供の頃は、誘拐に何度も遭った」

「！！」

「身代金、社会的地位、将来の身の保証…。　どいつもこいつも俺の身以外に目的があったんだ」
「…あ、そうか。　何回も誘拐される内に耐性ついてたのか」
「話を聞けよ…」
「聞いてるって。　だから、一哉が欲しい、本当にそれだけ」

そう聞いた時、ついにチェーンの余っていた部分が無くなった。
やっぱり、機械の力にはとてもじゃないけど敵わない。
ズルズルと壁の方に引き摺られていく。

「っ、！」
「ん、さすがに無理矢理引っ張られるのは怖い？」
「…別に？」
「うーん…、ちょっと場馴れしすぎたよ、一哉…」
「……知るかよ」

少々不満気味な顔が、目の前数センチまで迫ってくる。

「ま、いっか。　今日から俺が一哉を独占できるんだしね」

この時既に、チェーンは全て穴に呑み込まれていた。
俺は壁に両手両足を広げられ、張り付けられた様な格好になり、直樹に全てを晒させられている気がした…。

ｓｃｅｎｅ６（後書き）

この後の展開が…自分も分かりません！
…さぁ、これからどうしようか！！（焦；）

ｓｃｅｎｅ７（前書き）

続きです（゜∇゜）
夜更かしが祟って、体調を崩しましたｏｒｚ

scene7

「…マジで何考えてるか分かんねぇ…」
「いや…、そろそろ分かってもらわないと困るんだけど」
…張り付け状態になってから5分程経っていた。
直樹は俺を解放する気が微塵もないらしい。
「早く帰らねーと、寮長に怒られるぞ。　お前もそうだろ？」
「残念だけど、そういう事は先に手を打ってあるんだよね」
「…連絡済みかよ」
「二人とも自宅に一時帰宅、って事になってるから」
思ってたより計画的に仕組まれてたみたいだな。
今は下手に動いても逃げ場をなくすだけだ…。
「でさ、ちょっと相談があるんだけど」
「…ご勝手に」
「……俺、これからどうしたらいいわけ？」
「……は？」
「だから、今から何したらいいのか分からないんだって！」
…は……、はぃぃぃっ！！！？
え、何？　分からない！？

それってどういう事だよ！！？
『俺のモノにしたい』とか、危険極まりない発言までしてたってのにか！？

「手段はどうでもいいから、一哉を手に入れたいって思ったからここまでやったのに！」
「逆ギレすんな！」
「一哉の痛がる顔とか、怯えた顔とかはそそるけど…、何か…何かが違うんだ！」
「…俺としては、今の前半に身の危険を感じたぞ」

こいつ……まさか思いつきだけでここまでやったのか！？

「昔みたいに俺と話してよ！　カズ！！」
「…昔なんて知らない！　俺の周りにお前みたいな変態なんていなかった……は…ず……、……うぁっ！！？」

――――……、

―…『かずきくん！　いっしょにあそぼーよ！』

…見えたのは、

―…『かずき！　僕たちとかくれんぼしない？』

楽しそうに笑う、二人の少年。

―…『楽しいね！カズ！』

なっ…！？

「カズ！？」

「ぅくっ…！」

聞いたことがある…。

遊んだことがある…！

でも、これはいつの記憶だ…？

―…『ナオ！今日も楽しかったね！！』

―…『そう、だね…』

―…『？　どうしたの？』

―…『うぅ…』

―…『うわ！　ナオ、顔が真っ赤だよ！？　熱があるんじゃ…』

―…『……か、カズ…』

―…『何！？　つらいんでしょ、して欲しい事があったら何でも言ってよ！』

―…『その…、じゃあ……僕とキス、してくれる？』

―…『……え？』

…何なんだこのイメージは！？

ｓｃｅｎｅ７（後書き）

一哉の記憶が、少しずつ戻り始めたようです！

ｓｃｅｎｅ８（前書き）

遅くなりましたが、続きができました（ ∀｀）

scene8

―…『カズ…お願い』

服装から見て…小学校低学年ぐらい…。
こいつらは俺と直樹なのか！？

「カズ！　…どうしたの！？」
「お前、小さい頃……俺にキスを迫らなかったか？」
「！！」

とたんに直樹の顔が赤くなったり、青くなったりする。

「どうなんだ！」
「……あぁ、言ったよ」
「マジかよ…」

だとすれば、これは確かに俺の昔の記憶になる。
でも、そんな覚えはない…。

「やっぱり…、覚えてないんだろ？　一哉」
「それに、何で忘れてるのかも分からねぇしな…」

こういう時、ドラマとかだと…大抵は『事故で記憶喪失に』ってのがセオリーなんだろうけど…。

「今までに事故に遭った事すら一回もない…」

ここ数年、病院なんかには行ってないし…。

そもそも、もとから丈夫な方だから、滅多に体調を崩す事なんてない。

「その…、一哉…？」
「何だ？」
「一哉が孤児院から出ていった前の日の事って、覚えてる？」
「前日…？」

前日に何かあったのか？

「実は……」

――――――……

〔前日〕

カズと離ればなれになるなんて絶対イヤだ！
誰にも僕のジャマはさせないからね！！

「えっと…、あのクスリは……あの棚だったっけ？」

『あの日、俺は一哉を引き留めたい一心である薬を探したんだ』

「あっ、このビンかも。　…睡眠薬と、痺れ薬」

『とにかく動けなければ連れていかれない…って考えてさ』

「ぽいそん…あんど…べのむ？　こんな名前だったかな……？」

『そこには《ｐｏｉｓｏｎ＆ｖｅｎｏｍ》…まぁ、《毒》って書いてあったワケで』

「これ…全部飲ませればいいのかな？」

『今だから分かるけど、そんなに飲ませたら命に関わる量だ』

「カズの食事のお皿は…」

『それをお前の料理に一滴残らず入れた』

――――――……

「そんな事、俺は覚えてないぞ…！？」

「そりゃそうだ。　カズはその後倒れて、そのまま里親のところに連れていかれたからな。　後で分かったんだが、その時の臨死体験で記憶が飛んだらしい」

scene8（後書き）

毒物、ダメ、ゼッタイ

scene9（前書き）

続きです（゜∇゜;）

scene9

「…って、全部お前のせいじゃねぇか！」
「今思い出したんだからしょうがないだろ！」

毒物を盛られてたなんて…。
子供の頃から危険人物だったんだな…コイツ…。

「あの時は本当にごめん！　あんな事になるとは思わなかったんだよ！」

ったく…、とんだ奴に好かれたもんだな…。

「…いつから」
「え？」
「いつから俺のことが好きだったんだ」
「それは…」
「ん？」
「……初めて、会った時」
「それって…一目惚れって事なのか？」
「そうなるかな」

全然気付かなかった…、と言うか、忘れてたんだけどな。

「…悪いけど、今…そういう……『好き』とか、よく分かんねぇんだ」
「そう…だよな」
「あぁ」

…沈黙が気まずい。

直樹は本気だった。
俺はそれを振った。
忘れてたとは言っても、コイツは傷ついたに違いない。

「……」
「……」

どちらも…話を、切り出せずにいた。
いつまでこんな――…

「二人ともー、話ぐらいした方がいいんじゃないかー？」
「！？　何でお前が…っ」

その時、部屋の鉄製の扉を開けて入って来たのは…

「雅彦！！？」

クラスメイトの雅彦だ。

「何で今来たんだ！」
「おい、直樹！　雅彦と何か関係があるのか！？」
「まーまー、落ち着けよー」

一体何が起こってるんだ！？

ｓｃｅｎｅ９（後書き）

もうすぐ終わる…かも？

scene10（前書き）

最終回です（。□。；）

scene10

「一応、直樹との関係を教えようかなぁ？」
「…あぁ、頼む」
「ご勝手に」

そして、雅彦が話し始めた

「ストレートに言うと、親同士が裏の仕事で手を組んでたから…、結構小さい時から知り合いなんだよねぇ」
「裏の…仕事…？」
「うん、まぁ…人様に知られたら、刑務所行き決定かなー」
「っ刑務所！？」

そんなにヤバい事をやってんのかよ！

「俺の親はクスリの違法取り引き担当で、」
「僕のウチは、秘密を漏らそうとした奴等の後処理を担当してるんだー」
「お前ら、そんな事簡単に話していいのかよ！？」

待つこと十数秒。

「「…あ」」
「『あ』！？　ちょ、オイ待て！　『あ』って何なんだよ！！？」
ま、まさか、俺…消されるとかじゃない、よな…？
「…一哉…ちょっと向こうを向いてくれるかなー…？」

「…おぅ」

何か秘密の相談をするのか…？

「…！　おい、雅彦！　そんな物騒な物しまえ！」
「大きな声出さないでよー。　殺すコトがバレちゃうだろー！」
「まる聞こえだバカ！　秘密でも何でもねー！！」

ってか、俺の心配的中してた！

「……っく…」
「？」
「ふ、くく…、く」
「な、何だよ！」
「「あっははははは！！」
「なっ！！？」
「じょ、冗談に決まってるだろうが！」
「ここまで反応してくれるとは思わなかったよー！」

からかってやがったのか、コイツら！

「一先ず、ここから出ようか」
「…雅彦…」
「もー、そんな怖い顔しないでよ直樹ー」
「だって…！」
「（これ以上捕まえてても、嫌われるだけだよー…？）」
「……分かった」

…？　最後らへん、小声で聞こえなかったな…。

「…いいから出ようぜ」
「直樹ぃ…、急かさなくても、今案内するからさー」
そういえば、どこからが冗談だったんだ？
「あ、ここだよここー」
あ…、意外に近いところに出口があったんだな…。
「（一哉）」
「ん？　何だ？」
「（俺、諦めないから）」
「…やっぱり、あれは冗談ではない、と…？」
「（もちろん）」
「…そうか」
告白は冗談じゃないか…。
「俺は諦めない、絶対に諦めないから」
「う…」
「今は友達で我慢するから」
『今は』か。
「近いうちに…、その気にさせるさ」
「……」
目が本気だ。
茶化せないな、ここは…。

――…出口が見えてきた。

「必ず、振り向かせてみせる」

「最初はキスから」

「『俺も好きだ』って言ってくれるまで」

「いつまでも…待つから…、だから……！」

外への扉が開く。

「――――……もっと愛して！」

ｓｃｅｎｅ１０（後書き）

…あれ…？

『学園』タグなかったっけ？

…出てきたの、最初だけやーん！！

…はい、すいません、深く反省しております…ｏｒｚ

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5688w/

Be more！

2011年10月24日02時02分発行